二〇一九年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題〔専門科目〕【国語教育専攻】

解答上の注意

一. 国語教育専攻の入学試験問題は、〔専門科目・選択〕（配点60％）と〔専門科目・共通〕（配点40％）とに分かれています。

①**「専門科目・選択」**は、出願時に届け出た研究指導・指導教員の専門分野により、左記の表の「解答すべき問題」（選択一～選択八）を解答しなさい。なお、「解答すべき問題」以外を解答した場合、当該解答は「0点」となります。

志願票に記入した研究指導名	志願票に記入した指導希望教員名	「専門科目・選択」で解答すべき問題
国語科教育研究指導	幸田　国広	選択一　国語教育
国語科教育研究指導	町田　守弘	
日本語学研究指導	松木　正恵	選択二　日本語学（日本語教育を含む）
国文学研究指導	松本　直樹	選択三　古典文学　Ⅰ　上代文学
国文学研究指導	新美　哲彦	
国文学研究指導	福家　俊幸	選択四　古典文学　Ⅱ　中古文学
国文学研究指導	大津　雄一	選択五　古典文学　Ⅲ　中世文学
国文学研究指導	田渕　句美子	
国文学研究指導	中嶋　隆	選択六　古典文学　Ⅳ　近世文学
国文学研究指導	内山　精也	選択七　中国古典文学
国文学研究指導	堀　誠	
国文学研究指導	石原　千秋	選択八　近代文学
国文学研究指導	金井　景子	
国文学研究指導	和田　敦彦	

②**「専門科目・共通」**は、出願時に届け出た研究指導・指導教員の専門分野により、左記の表の「解答すべき問題」（共通A・B・Cのいずれか一問）を解答しなさい。なお、「解答すべき問題」以外を解答した場合、当該解答は「0点」となります。

志願票に記入した研究指導名	志願票に記入した指導希望教員名	「専門科目・共通」で解答すべき問題
日本語学研究指導	松木　正恵	共通A　日本語学（日本語教育を含む）
国文学研究指導	松本　直樹	共通B　古典文学　Ⅰ　上代文学
国文学研究指導	石原　千秋	共通C　近代文学

二. 解答用紙は、「問題番号」ごとに一枚使用すること。全ての解答用紙の所定欄に、受験番号・氏名・研究指導名・指導教員名、ならびに「問題番号」（例「選択八」・「共通A」など）を必ず記入すること。

三. 解答用紙のホッチキスは、はずさないこと。また、無解答の解答用紙でも提出すること。

四. 問題用紙は「十四枚」（本ページ含む）、解答用紙は「二枚」です。必ず枚数を確認すること。

以上

二〇一九年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
【専門科目・選択】 【国語教育専攻】

〔 選択一 〕 国語教育

※解答に際しては選択した問題番号を明記すること。

一、次のA～Hのうちから三題を選び、それぞれ簡潔に説明しなさい。

A 〔知識及び技能〕
B カリキュラム・マネジメント
C 習得・活用・探究
D 興水実の基本的指導過程
E トゥルミン・モデル
F 国語科における「見方・考え方」
G 推論の形式
H 生活綴方教育運動

二、次のI～Nのうちから二題を選び、具体的に論じなさい。

I 高校国語科新科目構成とそのねらい
J 昭和二二年版学習指導要領（試案）の歴史的位置
K 高大接続改革の目的と概要
L 益田勝実の古典教育論の特徴
M 「資質・能力」の育成が求められる背景
N 「サクラ読本」と「アサヒ読本」

三、高等学校における「話し合い」の学習活動を活性化させるためには、どのような目標・計画・方法・評価・留意事項が求められるか。単元指導計画における具体的な一場面を設定して、あなたの考えを述べなさい。

二〇一九年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
【専門科目・選択】 【国語教育専攻】

〔選択二〕 日本語学

一 次のA～Lの事項のうちから四題を選び、説明しなさい。

A 役割語　B テンス　C 松下大三郎
D 宣命体　E 四つ仮名　F『和名類聚抄』
G 形態素　H シソーラス　I 不変化助動詞
J 新方言　K 謙譲語　L コース・デザイン

二 次のM～Oのうちから一題を選び、具体的に論じなさい。

M 仮名遣いの歴史と「現代仮名遣い」の問題点について
N 古代語から現代語への、日本語動詞の活用体系の変遷について
O 国語教育・日本語教育における文法のありかたについて

三 日本語学が研究対象としている範囲・分野について、専門外の人にもわかりやすいように、具体例を交えながら説明しなさい。その際、研究方法や隣接領域にも触れ、日本語学研究の意義が明確になるように論じなさい。

二〇一九年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
【国語教育専攻】
〔専門科目・選択〕

〔選択三〕 古典文学（Ⅰ） 上代文学問題

一、次の（A）～（D）のうちから、二題を選択して論述しなさい。解答の際には、選択した問題番号を明記すること。

（A）『古事記』の三巻構成
（B）「風土記」の成立
（C）『日本書紀』神代巻の構成
（D）古代歌謡と初期万葉

二、次の（E）～（K）のうちから、三題を選択して簡潔に（解答用紙八行以内）説明しなさい。解答の際には、選択した問題番号を明記すること。

（E）黄泉戸喫　（F）根堅州国　（G）イハノヒメ　（H）防人歌
（I）大伴旅人　（J）柿本人麻呂歌集　（K）ペルセウス・アンドロメダ型神話

三、上代文学の諸作品には、千年以上の長きにわたり、各時代の思潮の影響を受けながら享受されてきた歴史がある。そのことを踏まえつつ、それらを研究することの意義について、あなたの考えを簡潔に（解答用紙一〇行以内）述べなさい。

（上代文学問題 以上）

二〇一九年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
【専門科目・選択】　【国語教育専攻】

〔 選択 四 〕古典文学（Ⅱ） 中古文学

解答に際しては選択した問題番号を明記すること。

一、次の(A)～(D)のうち、二題を選択して論述せよ。

(A)『伊勢物語』を教材とする意義

(B)『蜻蛉日記』と『更級日記』との共通性

(C)歌物語の特質

(D)『源氏物語』の諸本研究の意義

二、次の（E）～（M）のうち三題を選択して、簡潔に説明せよ。

（E）『大和物語』　（F）『成尋阿闍梨母集』　（G）『夜の寝覚』

（H）『栄花物語』　（I）『竹取物語』　（J）『和泉式部日記』

（K）藤原彰子　（L）陰陽道

（M）平安時代の文学における召人

三、中古文学を学校教育で学ぶ意義とは何か、あなたの考えを述べよ。

二〇一九年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
【国語教育専攻】
【専門科目・選択】

〔選択五〕 古典文学 （Ⅲ） 中世文学

一、次の①～⑧の中から二題を選択して、詳しく論述しなさい。

① 『平家物語』の成立について
② 『平家物語』叙事詩論について
③ 『平家物語』教材化の歴史と教材としての可能性について
④ 『宇治拾遺物語』の作品世界の特質について
⑤ 『新古今和歌集』の成立について
⑥ 題詠と本意について
⑦ 定数歌の歴史と展開について
⑧ 中世の宮廷と女房文学について

二、次の①～⑩の中から三題を選択して、簡潔に説明しなさい。

① 平治物語
② 閑居之友
③ 今昔物語集
④ 愚管抄
⑤ 承久記
⑥ 無名草子
⑦ 古来風体抄
⑧ 千五百番歌合
⑨ とはずがたり
⑩ 風雅和歌集

二〇一九年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
【専門科目・選択】 【国語教育専攻】

【選択六】 古典文学（Ⅳ） 近世文学

一、井原西鶴・松尾芭蕉・近松門左衛門・上田秋成・鶴屋南北の中から、一人を選び、その文芸の特徴と文学史上の位置について、自由に論じなさい。

二、次の（1）～（6）の中から一題を選択し、論述しなさい。

（1）浅井了以『浮世物語』の概要と特徴について、井原西鶴『好色一代男』と比較しながら述べよ。

（2）井原西鶴の「町人物」の代表作品を二つあげ、その創作方法の相違について述べよ。

（3）貞門俳諧と談林俳諧について、その付合技法の特徴と相違について述べよ。

（4）芭蕉俳諧の「不易流行」について述べよ。

（5）近松門左衛門『曾根崎心中』の概要と文学史的意義について述べよ。

（6）鶴屋南北『東海道四谷怪談』の概要と文学史的意義について述べよ。

三、次の（7）～（15）の中から三題を選択し、簡潔に説明せよ。

（7）竹斎　（8）好色五人女　（9）猿蓑

（10）恋川春町　（11）雨月物語　（12）女殺油地獄

（13）与謝蕪村　（14）南総里見八犬伝　（15）柳亭種彦

二〇一九年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
【専門科目・選択】 【国語教育専攻】

〔選択七〕 中国古典文学 問題

一 唐・李白の「春夜宴従弟桃花園序」という文である。この文を読んで、設問に答えなさい。

①夫天地者、萬物之逆旅、光陰者、百代之過客。而②浮生若夢。爲歡幾何。古人秉燭夜遊、良有以也。況陽春召我以煙景、大塊假我以文章。會桃李之芳園、序天倫之樂事。羣季俊秀、皆爲惠連。吾人詠歌、獨慚A康樂。幽賞未已、高談轉清。開瓊筵以坐花、飛羽觴而醉月。不有佳詠、何伸雅懷。如詩不成、罰依金谷酒數。*

＊「金谷酒数」……西晋・石崇は自ら築いた金谷園にてしばしば宴会を催し、詩が作れなかった参加者に罰杯三杯を飲ませたという故事がある。

〔設問一〕 傍線①「夫天……過客」を、口語訳しなさい。

〔設問二〕 傍線②「浮生……以也」を、すべて平仮名による書き下し文にするか、現代中国語の発音記号（ピンイン）で書くか、いずれかを選んで答えなさい。

〔設問三〕 二重線A「康樂」は、六朝宋の詩人・謝霊運を指す。謝霊運の詩について、知るところを記しなさい。

〔設問四〕 この文の文体的特徴について簡潔に記しなさい

二 次のア～オの中から一つを選択し、その記号を解答欄に記した上で、説明ならびにあなたの考えを記しなさい。

ア 「文言」と「白話」の小説について

イ 「楽府」と「詩」の違いについて

ウ 中国文学の政治性について

エ 日中比較文学の視点について

オ 学校教育における「漢文」の位置づけについて

三 次の（A）～（J）の中から三つの項目を選び、それぞれの文学史ないしは文化史的意味を中心に説明しなさい。

（A）詩経国風　（B）『説文解字』　（C）『楚辞』　（D）伝奇小説

（E）古文運動　（F）「長恨歌」　（G）江西詩派　（H）三言

（I）大江匡衡　（J）魯迅「狂人日記」

二〇一九年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
【専門科目・選択】 【国語教育専攻】

［選択八　近代文学］

一　近代文学の成立に関して、あなたの考えるところを述べなさい。

二　次の（A）～（E）の中から一題を選択して論じなさい。

（A）硯友社について
（B）日露戦争と従軍作家について
（C）白樺派の文学について
（D）プロレタリア文学について
（E）記号論と文学研究について

三　次の（A）～（G）の中から三題を選択して説明しなさい。
（「」は作品名、『』は雑誌名を示す）

（A）北村透谷　（B）樋口一葉　（C）「金色夜叉」
（D）「或る女」　（E）『スバル』　（F）山本有三
（G）「仮面の告白」

二〇一九年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
【国語教育専攻】
〔専門科目・共通〕

〔共通A〕 日本語学（含日本語教育）

松木正恵

次の文章は、日本語学研究史上重要な役割を果たした二人の日本語学者（X博士とY博士）を取り上げ、それぞれの「詞」と「辞」についての考え方や、文の構造についての捉え方の違いを説明した文章である。（部分的に省略したところがある。）この文章を読んで、後の問いに答えなさい。

X博士の詞・辞は、博士の自立語・付属語の別名で、その間に出入りは全くない。単独で文節を構成し得る単語（自立語）がそのまま直ちに詞であり、単独で文節を構成し得ない単語（付属語）がそのまま直ちに辞である。

文を実際の言語として出来るだけ多く句切つた最も短い一句切（國語法要説）と定義されるX博士の文節は、博士の文法論の基礎となる具体的単位であり、これを意味の面から更に分析して単語を抽象する時、その文節構成に与かる力の差によって、右のような自立語（詞）・付属語（辞）の対立の認定に至るのは必然的な結果であって、その限りにおいて批判の余地は全くない。しかしながらそのような博士の文法的立場そのものには、実は大きな疑問があるのではないかと思われる。それは博士の文節が、発音上の単位として設定されていて、構文上の単位としては設定されていないことである。もちろん文節が「一定の意味」をもつことも指摘され、更に

文節は文を構成する単位であつて

という説明はされている。しかしそれは博士が「前後に音の切れ目がある」と規定される文を、外形的に「分解して最初に得られる単位」である、という意味において言われており、文の「一つの纏つた完いものである」という内面的特徴を構成する単位として言われているのではない。文節は第一義的にはあくまで発音上の単位なのである。それは博士の文節が構文の機構の解明に対して、直接に効力を持たないというだけでなく、博士の詞・辞が果して文法的な品詞分類に属するか、という疑問へと発展するであろう。品詞分類の定義いかんにもよることではあろうが、語が構文の上に果す役割の差に応じて語を分類するのが、文法的品詞分類に他ならないと思われるからである。もっとも博士のことだから、はっきりとした形で発表されなくても、文節の構文上の性格に対しては、深い思索があったのだろうと思われる。晩年に「文節から文の構造を説」くために①連文節というものを立て、

彼等の←かぼそい・小さい一体には←その一時の・ウィーンの一気候は←たへ難い一もので一あつたのだ」

のように構文を解析しておられることからもそれは想像される。右の解析の←は「すぐ後につづかぬ」文節の切れ目を示し、したがってその文節のつづく先は多少とも離れた文節であるということになるのだが、このような考え方を徹底させるには、

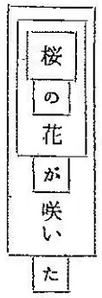
彼等の体、かぼそい体、小さい体、　その時の気候、ウィーンの気候

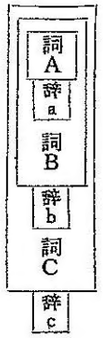
のような意味的結合体を考える必要にせまられるはずである。②これは文節の崩壊に他ならない。したがって博士の文節の考え方自身と構文論とはどうしても一致を見ることができないであろう。このような文節の崩壊を避けるかぎり、文は「順次互に竹の節の如く結合されてゐると考へられた」とY博士が批判されたような発音上の単位に分析されるに留まるのである。だとすればX博士の詞・辞は、発音上の単位である文節の構成要素としての対立であり、構文上の要素としての対立でなく、したがって博士の詞辞分類は、単語分類ではあっても、品詞分類と言えるかどうか、疑問の余地があると言わざるを得ないと思われる。

〈中略〉

二〇一九年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
【国語教育専攻】
〔専門科目・共通〕

Y博士の詞・辞は、その名称こそX博士の継承ではあっても、内容は全くの別物である。そして実は右に述べたようなX博士の詞・辞の欠点を克服し得ているという点では、その修正発展としての意味を兼ねるものであろう。Y博士が言語過程説、すなわち言語を言語主体の表現活動として捉える立場から、単語を概念化過程を経るものと経ないものとに二大別され、前者を詞、後者を辞と呼ばれることは、すでに周知のことと思う。博士の説明に沿ってもう少し解説すれば、詞は客体的なものを、辞は主体的なものを表わす単語として、根本的に異次元のものとされる。「否定」「うち消し」と言えば概念化過程を経た客体的な表現として詞に属するが、「ず・じ」と言えば概念化過程を経ない主体的な否定することの表現として辞に属する、というような説明によって、博士の詞と辞の性質の相違をよく理解することができる。このような規定のし方は、語の表現性に即してなされたものだが、実は博士の詞・辞は、構文論と密接な関係がある点に注目すべき特色があると言わねばならない。いわゆる(ア)型構文論における、詞・辞の役割の差がそれである。





たとえば右例におけるごとく、詞Aは辞aに総括され、詞Bは詞A＋辞aを包摂した大きな詞として更に辞bに総括され、こうして詞と辞とは、包まれるものと包むものという関係において結合し、構文の単位となるという考え方である。この詞＋辞の結合体を博士は**句**と名付けられるが、博士の句の最も小さな形こそX博士の文節に他ならず、構文上の最小単位であるがゆえに、発音上にも前後に息の切れ目が生じ得るのだ、という趣旨の説明を通して、発音上の外的形態は構文上の内的意味によって裏付けられ、こうして文節は構文論に橋わたしされたのであった。同時にX博士においては文節の構成要素であった詞・辞は、句を構成するところの二要素、すなわち包まれるものと包むもの、もっと適切に言い換えれば、包まれるものと包むこと、という構文上の職能の差として捉えなおされたのであった。言葉を二分して概念を表示する要素と概念間の関係を表示する要素とにわけ、それぞれ意義素（セマンチーム）・形態素（モルフェーム）と呼ぶ習慣はヨーロッパにもあることだが、ほぼそれにあたるものが、包まれるものと包むこととして捉えられたということは、構文のための客体的な素材概念と、それらを有機的に結合させる言語主体の主体的な表現活動との、どの言語にも必要な異質の二要素の本質が明らかにされたという重大な意味があり、山田孝雄博士の文法論においてさえ、構文の秘密がこれほど明確には解明されていないことを思うとき、博士の詞辞論の功績はむしろここにあると言うべきだと思われる。同時にそれは博士の詞辞分類が、本当の意味での品詞分類であることを意味する。品詞分類がただの単語分類でない唯一の理由は、語が文中で果す構文上の職能差による分類である所にあると思われるからである。したがって品詞分類そのものとしても、見るべき成果は決して少なくなかった。たとえば、従来とかくすっきりしなかった接尾語と助動詞との差を、詞と辞との差として明らかにし、具体的には（　イ　）の助動詞と呼ばれて来た「（　ウ　）」などを、接尾語に配属されたことなど、その最も著しいものであろう。

〈中　略〉

意義素・形態素という考え方そのものは、ヨーロッパの言語学から入って来たものであるが（もっとも学者によってその内容は必ずしも同じでない。ここで言うのはヴァンドリエスのそれにあたる）、この両要素の差についての自覚は、きわめて古く、それも上代においてすでに生れていた。周知の（　エ　）がそれである。

今宣久奈良麿義兵起而被扈多利志秦等孚裏遠流賜和、今遺秦等者、懇心無而、清明心孚持而仕奉宣。

このような表意的大字と、表音的小字との使いわけは、固有の文字を持たず、伝来の漢字によって書くより仕方がなかったという事情から生み出されたものであることは、今さら言うまでもないことであろう。一体意義素と形態素の両方が、構文のためには是非必要であること前述の通りだが、意義素がどの言語においても単語という形式をとるのに対して、形態素の方が具体的にどういう形式をとるかは、言語によってかなりの相違がある。

二〇一九年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
【国語教育専攻】
［専門科目・共通］

日本語	英語	中国語
私は彼を愛する	I love him	我愛他
彼は私を愛する	He loves me	他愛我

とならべてみると、形態素は日本語では独自の単語としての単独形式で表わされ、英語では意義素のための単語の一部分を変化させるという部分形式で表わされ、中国語は右の二言語のような顕在的形式を持たず、語順という潜在形式で表わされる、ざっとこのような傾向の差を持つことが認められており、これによってそれぞれ膠着語・屈折語・孤立語と呼びわけられる習慣がある。整理をすると、

- 形態素のとる形式
  - 顕在形式
    - 単独形式……日本語など……膠着語
    - 部分形式……英語など……屈折語
  - 潜在形式……中国語など……孤立語

という形式になる。もっともこれは大雑把な傾向の差とも言うべきもので、例外は決して少なくない。英語の前置詞などは、むしろ膠着的形態素と見られるし③中国語にも膠着的形態素はある。そしてこのような立場からは、日本語の活用語尾は（ア）的形態素と認められるのである。（エ）の筆者が、付属語と用言の活用語尾とを意義素から区別して、表音的小字で書きわけたことの理由も以上で明らかであろう。中国語は形態素をほとんど語順という潜在形式でまかなうために、顕在する日本語の形態素を写すべき漢字は、求めても得られるはずがなかったからである。もちろんこのような書きわけは、そういう漢字がないという消極的な事情の結果にすぎないであろうが、中国語という、構造を異にする言語との接触によって培われた日本人の言語感覚は、そのまま後にうけつがれていったに違いない。特に漢文訓読の世界においては、常に右のような形態素を補読する必要があり、補読のために施した訓点から**てにをは**又は**てには**という語が出来て、これがほぼ日本語の形態素を指す呼び名となって行ったのも、こうした感覚の継承に他ならない。（渡辺実「詞と辞」『続日本文法講座1』より）

問1　傍線部①の「連文節」の考え方を、本文中の次に掲載されている例文（「彼等の～あったのだ」）とその係り受け図を見ながら、具体的に説明しなさい。

問2　傍線部②とはどのような意味か。なぜこれが文節の崩壊であり、構文論との一致を見ることができないということになるのか、わかりやすく説明しなさい。

問3　括弧（ア）に、Y博士の構文論を説明する上で重要な漢字二字の単語を入れなさい。また、本文中の次に掲載されている例文（「桜の花が咲いた」）の構造図を参考にしながら、次の文の構造図を図示しなさい。

・昨日太郎が花子に花束をあげたらしい。

問4　Y博士が接尾語と認定した助動詞とは具体的に何か。括弧（イ）にいわゆる助動詞の意味・用法の名称を、括弧（ウ）にいわゆる助動詞の具体的な形式を入れなさい。

問5　括弧（エ）に入る文体の名称を書きなさい。（二カ所とも同じ用語が入る。）

問6　傍線部③について、具体例を挙げて説明しなさい。また、括弧（オ）に入る用語を文中から選んで書きなさい。

問7　X博士とは誰のことか。氏名を示した上で、その文法論の特徴、および日本語学史上の業績について説明しなさい。

問8　Y博士とは誰のことか。氏名を示した上で、その文法論の特徴、および日本語学史上の業績について説明しなさい。

二〇一九年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
【専門科目・共通】　【国語教育専攻】

【共通B】上代文学（松本直樹）

〈問題〉　次の文章は本居宣長『古事記傳』の一節で、『古事記』の文体についての記述である。これを読んで、後の問いに答えなさい。解答の際には、問いの番号を明記すること。

すべての文、漢文の格に書かれたり。抑此記は、もはら古語を傳ふるを旨とせられたる書なれば、A中昔の物語文などの如く、皇國の語のまゝに、一もじもたがへず、B假字書にこそせらるべきに、いかなれば漢文には物せられつるぞといはむか。いで其ゆゑを委曲に示さむ。先づ大御國にもと文字はなかりしかば、上つ代の古事どもも何も、直に人の口に言ひ傳へ、耳に聽き傳はり来ぬるを、やゝ後に、外國より書籍と云ふ物渡り参ゐ来て、其を此間（ここ）の言もて讀みならひ、その義理（こころ）をもわきまへさとりてぞ、其の文字を用ひ、その書籍の語を借て、此間の事をも書き記すことにはなりぬる。されどその書籍てふ物は、みな異國の語にして、此間の語とは、用格もなにも、甚く異なれば、その語を借りて、此間の事を記すに、全く此間の語のまゝには、書き取りがたかりし故に、萬の事、かの漢文の格のまゝになむ書きならひ来にける。故れ奈良の御代のころに至るまでも、物に書るかぎりは、C此間の語の隨なるは、をさをさ見えず。　萬葉などは、歌の集なるすら、D蝦辭など、みな漢文なるを見てもしるべし。かの物語書などのごとく、こゝの語のまゝに物書く事は、今の京になりて、平假字といふもの出来ての後に始まれり。

但し歌と祝詞と宣命詞と、これらのみは、いと古へより、古語のまゝに書き傳へたり。これらは言に文（あや）をなして、麗くつゞりて、唱へ挙て、神にも人にも聞き感でしめ、歌は詠（なが）めもする物にて、一字も違ひては悪しかる故に、漢文には書がたければぞかし。故れ歌は、此記と書紀とに載れる如くに、字の音をのみ假てかける。これを假字といへり。祝詞・宣命は、又別に一種の書法ありて、世にE宣命書といへり。おほかたこれらの餘、かならず詞を文（あや）なさずても有るべきかぎりは、みな漢文にぞ書けりける。かゝれば此記を撰定（えら）ばれつるこゝろも、歌・祝詞・宣命などの餘には、いまだ假字文といふ書法は無かりしかば、なべての世間のならひのまゝに、漢文には書かれしなり。

さてしか漢文を以て書くに就ては、そのころ其の学問盛にて、そなたざまの文章をも、巧にかきあへる世なれば、是れも書紀などの如く、其文をかざりて物せらるべきに、さはあらで、漢文のかたは、たゞありに拙げなるは、ひたぶるに古の語を傳ふることを旨とせる故に、漢文の方には心せざる物なり。故れ字の意にもかゝはらず、又その置處などにも拘らざるところ多かりかし。又序に、全以レ音連者、事趣更長、是以今或一句之中、交二用音訓一、或一事之内、全以レ訓録、とあるをもて見れば、全く假字書の如くにもせまほしく思はれけむ、撰者の本意しられたり。故れ大體は漢文のさまなれども、又ひたぶるの漢文にもあらず、種々のかきざま有て、或は假字書の處も多し。F久羅下那洲多陀用幣流などもあるが如し。（中略）

又漢文ながら、古語の格ともはら同じきこともあり。立二天浮橋一而指二下其沼矛一などの如し。又漢文に引かれて、古語のさまにたがへる處も、をりをりは無きにあらず。名二其子一云二木俣神一とあるたぐひ、古語にかゝば、其子名云二木俣神一とか、其子名二木俣神一とか有べし。（中略）G更往二廻其天之御柱一如レ先、これらも如レ先てふ言の置所、此方の語とたがへり。更其天之御柱如レ先往廻といふぞ、此方の語つゞけなる。此の類ひ心をつくべきことなり。よくせずば漢文に惑ひぬべし。又懐妊臨レ産、或は不レ得レ成レ婚（中略）などの類は、ひたぶるの漢文にして、さらに古語にかなはず。但しかくさまの文といへども、ことさらに好みてにはあらざるめれど、当時物書くには、なべて漢文のみになれぬるから、とりはづしては、おのづからかゝることも雑（まじ）れるなるべし。

（本居宣長『古事記傳』一之巻より）

問一、傍線部A「中昔の物語文」とあるが、その代表的な作品名を三つ答えなさい。

問二、傍線部B「假字書にこそせらるべきに、いかなれば漢文には物せられつるぞ」と問題提起しているが、それに対する宣長の説明を、歌・祝詞・宣命との違いにも留意して簡潔に（解答用紙3～5行程度）纏めなさい。

問三、傍線部C「此間の語の隨なるは、をさをさ見えず。」を、「此間」の具体的な内容が分かるように現代日本語に訳しなさい。

問四、傍線部D「蝦辭」について説明しなさい。

問五、傍線部E「宣命書」について説明しなさい。

問六、傍線部F「久羅下那洲多陀用幣流」を全て平仮名の訓読文にしなさい。

問七、傍線部G「更往二廻其天之御柱一如レ先」を漢字仮名交じりの訓読文にしなさい。

問八、『古事記』と『日本書紀』の「漢文」の違いについて、宣長の考えを簡潔に（解答用紙3～5行程度）纏めなさい。

問九、最終段落の内容を要約しなさい（解答用紙3～5行程度）。

二〇一九年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
【国語教育専攻】
【専門科目・共通】

【共通C】

以下に示すのは、田山花袋『蒲団』（一九〇七年）の冒頭近くの一節です。これを読んであとの問いに答えなさい。

麹町土手三番町の一角には、女学生もそうハイカラなのが沢山いない。それに、市ケ谷見附の彼方には時雄の妻君の里の家があるのだが、この附近は殊に昔風の商家の娘が多い。で、尠くとも芳子の神戸仕込のハイカラはあたりの人の目を聳たしめた。時雄は姉の言葉として、妻から常に次のようなことを聞される。

「芳子さんにも困ったものですねと姉が今日も言っていましたよ、男の友達が来るのは好いけれど、夜など一緒に二七(不動)に出かけて、遅くまで帰って来ないことがあるんですって。それゃ芳子さんはそんなことはないのに決っているけれど、世間の口が喧しくって為方がないといっていました。」

これを聞くと時雄は定って芳子の肩を持つので、「お前たちのような旧式の人間には芳子の遣ることなどは判りゃせんよ。男女が二人で歩いたり話したりさえすれば、すぐあやしいとか変だとか思うのだが、一体、そんなことを思ったり、言ったりするのが旧式だ、今では女も自覚しているから、しようと思うことは勝手にするさ。」

この議論を時雄はまた得意になって芳子にも説法した。「女子ももう自覚せんければいかん。昔の女のように依頼心を持っていては駄目だ。ズウデルマンのマグダの言った通り、父の手からすぐに夫の手に移るような意気地なしでは為方がない。日本の新しい婦人としては、自ら考えて自ら行うようにしなければいかん。」こう言っては、イブセンのノラの話や、ツルゲーフのエレネの話や、露西亜、独逸あたりの婦人の意志と感情とともに富んでいることを話し、さて、「けれど自覚というのは、自省ということをも含んでおるですからな、無闇に意志や自我を振廻しては困るですよ。自分の遣ったことには自分が全責任を帯びる覚悟がなくては。」

芳子にはこの時雄の教訓が何より意味があるように聞えて、渇仰の念がいよいよ加わった。基督教の教訓より自由でそして権威があるように考えられた。

芳子は女学生としては身装が派手過ぎた。黄金の指環をはめて、流行を趁った美しい帯をしめて、すっきりとした立姿は、路傍の人目を惹くに十分であった。美しい顔というよりは表情のある顔、非常に美しい時もあれば何だか醜い時もあった。眼に光りがあってそれが非常によく働いた。四、五年前までの女は感情を顕わすのに極めて単純で、怒った容とか笑った容とか、三種、四種位しかその感情を表わすことが出来なかったが、今では情を巧に顔に表わす女が多くなった。芳子もその一人であると時雄は常に思った。

芳子と時雄との関係は単に師弟の間柄としては余りに親密であった。この二人の様子を観察したある第三者の女の一人が妻に向って、「芳子さんが来てから時雄さんの様子はまるで変りましたよ。二人で話している処を見ると、魂は二人ともあくがれ渡っているようで、それは本当に油断がなりませんよ。」と言った。他から見れば、無論そう見えたに相違なかった。けれど二人は果してそう親密であったか、どうか。

若い女のうかれ勝な心、うかれるかと思えばすぐ沈む。些細なことにも胸を動かし、つまらぬことにも心を痛める。恋でもない、恋でなくもないというようなやさしい態度、時雄は絶えず思い惑った。道義の力、習俗の力、機会一度至ればこれを破るのは帛を裂くよりも容易だ。ただ、容易に来らぬはこれを破るに至る機会である。

この機会がこの一年の間に尠くとも二度近寄ったと時雄は自分だけで思った。一度は芳子が厚い封書を寄せて、自分の不束なこと、先生の高恩に報ゆることが出来ぬから自分は故郷に帰って農夫の妻になって田舎に埋れてしまおうということを涙交りに書いた時、一度は或る夜芳子が一人で留守番をしている処へゆくりなく時雄が行って訪問した時、この二度だ。初めの時は時雄はその手紙の意味を明かに了解した。その返事をいかに書くべきかに就いて一夜眠らずに懊悩した。穏かに眠れる妻の顔、それを幾度か窺って自己の良心のいかに麻痺せるかを自ら責めた。そしてあくる朝贈った手紙は、厳乎たる師としての態度であった。二度目はそれから二月ほど経った春の夜、ゆくりなく時雄が訪問すると、芳子は白粉をつけて、美しい顔をして、火鉢の前にぽつねんとしていた。

「どうしたの、」と訊くと、

「お留守番ですの。」

「姉は何処へ行った？」

「四谷へ買物に。」

と言って、じっと時雄の顔を見る。いかにも艶かしい。時雄はこの力ある一瞥に意気地なく胸を躍らした。二語三語、普通のことを語り合ったが、その平凡なる物語が更に平凡でないことを互に思い知ったらしかった。この時、今十五分も一緒に話し合ったならば、どうなったであろうか。女の表情の眼は輝き、言葉は艶めき、態度がいかにも尋常でなかった。

「今夜は大変綺麗にしてますね？」

男はわざと軽く出た。

「え、先程、湯に入りましたのよ。」

「大変に白粉が白いから。」

「あらまア先生！」と言って、笑って体を斜に嬌態を呈した。

時雄はすぐ帰った。まア好いでしょうと芳子はたって留めたが、どうしても帰ると言うので、名残惜しげに月の夜を其処まで送って来た。その白い顔には確かにある深い神秘が籠められてあった。

問一　『蒲団』の文学史上の意義について、知るところを書きなさい。

問二　この一節を、芳子のセクシュアリティに注目して分析しなさい。

以上